

環境保全



静岡県環境保全協会は静岡県の森づくりを応援します。
この印刷物の紙の価格には、林地に捨てられる間伐材を
資源として活用する費用の一部が含まれています。

平成22年10月

静岡県環境保全協会

“住まい”と“まち”を流れる風を考える



(株)川口建築都市設計事務所
専務取締役 川口 良子
(静岡県環境審議会副会長)

今夏は大変な酷暑でした。めったなことでは異常気象とは言わない気象庁も、今年は30年に一度の異常気象だと発表しました。二酸化炭素(CO₂)など温室効果ガスがもたらす地球温暖化の影響が、日々の暮らしの場面にも、具体的に現れてきていると感じられ、「地球は本当に大変な状況では?」と、不安が募ります。気象庁によると日本の年平均気温は、長期的には100年あたり約1.13℃の割合で上昇し、特に1990年代以降、高温となる年が頻出しているとのこと。環境に負荷をかけない暮らし方に、心して取り組まなければならないと思う毎日です。特に暑さとの向き合い方を考えなければなりません。

風を通す伝統的な住まい

鎌倉時代、吉田兼好は徒然草で「家の作りようは、夏をむねとする。冬はいかなる所にも住める。暑き頃わるい住居は耐え難い事だ」と述べています。古の人々も、高温多湿の日本の夏は過ごしにくいと感じていたことがわかります。そして、伝統的な日本の家は、夏に適した造りになっています。深い軒や縁側により直射日光から隔てられた部屋、断熱性に優れた「わらぶき」「かやぶき」の屋根、建物の中の「風の道」となる土間や坪庭、いつでも開放的な空間となる障子や襖といった軽くて薄い間仕切り、床を上げての靴を脱ぐ暮らし等、蒸し暑さを凌ぐ工夫が多くみられます。特に、通風への配慮は大切にされ、家相でも、空気、湿気の滞りは嫌われます。風速1mの風で、体感温度は1度下がると言われます。暑さをしのぐためには、風を活かすことが大切です。



視線を遮りながら、風を通す御簾戸



小さな庭による涼しさの演出

現代の住まい

現代の日本の夏は、昔よりさらに過ごしにくくなっています。酷暑の今夏、熱中症が多発し、エアコンを上手に使うことが盛んに推奨されていました。例年は、省エネのため「エアコン温度は28度で設定し、冷やし過ぎを注意しましょう」と言われていましたが、今年は、「エアコン温度は室温が28度を超えないように」との呼びかけに変わっていました。室内環境を人工的な機械管理に委ねる状況は、なるべく少なくしたいと思っても、高密度な都市での暮らし、プライバシー重視の価値観の浸透、防犯への配慮の必要性により、「暑かったら窓を開ける」という古き良き時代の暮らし方は難しくなっています。

さらに、家は土地と暮らしに合わせて「普請する」ものから、好みのデザインを見付けて「買う」商品へと変わってきています。昨今の住宅の様式、デザインは百花繚乱、様々な目新しい機能や設備も盛んにPRされ、選り取りみどりです。

それに伴い、その土地に根差した伝統的な建築様式の意味する、自然、風土とのつきあい方に関する様々な事柄を、意識する機会は少なくなっています。暮らし方もすっかり様変わりしています。特に風への意識は、高气密・高断熱に対する要望の高まりや、空気環境を人為的に管理する様々な技術の普及により、薄くなっています。

流れる風の温もりや涼しさで四季を感じる、風を意識した家づくりを、温故知新、昔からの知恵を取り入れつつ、新しい技術を組み合わせながら考えることで、現代版の地域の気候・風土に合った、夏をむねとした住まいを実現していきたいものです。

風を地域ぐるみで考える

また、家の内部に目を向けるだけでなく、取り入れる風を冷やすため、家の廻りの微気候（※）にも十分配慮したいものです。緑や土がもつ、気化熱による温度を下げる力を、最大限に活かす工夫が大切です。庭の確保が難しい場合は、屋上緑化や壁面緑化等、立体的に緑を確保したり、アスファルトやコンクリート舗装の駐車場を土に戻したりすること等が考えられます。近隣でまとまって取り組めば、地域全体の風を涼しくすることにつながります。



屋上テラスと一体的となった開放感のある居室



庭の緑は、建物への直射日光を和らげ、風を冷やしてくれます

かつて、町屋での暮らしにおいて、「お互いさま」の規範により、隣近所の採光や通風に出来るだけ支障をきたさないよう、建物配置への配慮がなされていました。地域ぐるみで、光と風の環境を守る暗黙の約束ごとがあったのです。そうした意識を、私たちは忘れがちです。地域で共に快適に暮らすための様々な知恵を、改めて地域で積み上げていくことが望めます。そして、良好な近隣関係があればこそ、せいせいと窓を開けた暮らしも可能になるのです。

また、近年、地方都市でも増えてきたマンション等の高層ビルは、周辺の風環境に影響を与えます。ビルを建てる関係者や周辺住民は、風への関心を持ち、共に、その対策に留意していくことが、大切になっています。



まち中での路地の緑
高密度なまちでの効果的
な緑です



商店街のアーケードを利用し
た緑のカーテン
小さな工夫でも、皆で取り組
むことで大きな効果を生みま
す。

(※) 微気候

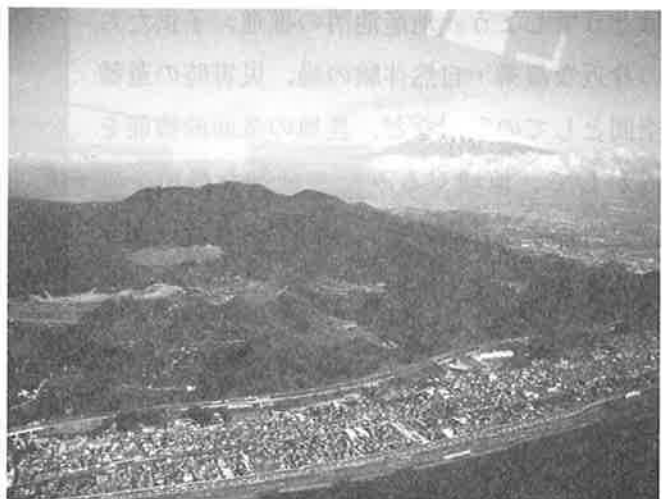
住まいとその周辺に限った局地的な気候のことを言います。水平の広がりには1 cm～100m、垂直の広がりには1 cm～2 mくらいの地面近くの気層の気候。

都市の風の道

私の暮らす地域は、海に近く、海陸風—海面より陸地の方が暖まりやすいことから生じる風—を感じます。地域には特有の風があります。その都市を流れる風の質を、良好に保つことが大切です。昨今のヒートアイランド現象は、風の質を悪くします。

アスファルトやコンクリートの蓄熱、緑地の減少、冷房の廃棄熱や自動車の排気ガスの影響で、都市部の気温が高くなるヒートアイランド現象は、東京など大都市だけの問題ではなくなっています。静岡県内の都市においても、約30年の間に熱帯夜の平均年間発生日数が1.6～2.4倍の増加しており、ヒートアイランドは進行しています。

その対策として、まち中の水辺や緑地など、クールスポット（空気の冷えた場所）からの風を、河川や道路等の「風の道」を通して、都市内に行き渡らせることの有効性が注目さ



山、海、川等豊かな自然に恵まれた静岡県
地域には、特有の風の流れがあります

れています。風を冷やして流す機能を視点にした、まちづくりの取り組みを期待します。

近頃、近隣公園や住区公園等の身近な公園で、防犯や管理をしやすくする目的で、伸びすぎた(?)木を伐ったり、土の部分を舗装したりすることをよく耳にします。クールスポットとしての役割に視点を持てば、公園の緑被率や地表面の保水力の維持・向上の大切さへの関心を高めることができます。

都市内を縦横に流れているはずの水路の多くは、蓋がされています。風の道としての機能を高めるため、可能な場所から水路の蓋を外し、水辺を増やすことを考えてみてはどうでしょうか？

道路の風の道としての役割を考えたならば、強剪定により、本来の樹形と異なる変形した街路樹が並ぶ景観を改善し、夏にきちんと緑陰を形成することの大切さに気付くと思います。

また、人口が減り、住宅が余る時代です。市街化区域内の農地を、早期に市街化すべき土地として捉えるのではなく、都市環境を維持する緑地、クールスポットとして評価してはどうでしょう。地産池消の推進、子供たちの身近な農業・自然体験の場、災害時の避難空間としての利用など、農地の多面的機能を活かして、地域ぐるみで、身近な農地を維持・管理する仕組みを、検討すべき時期がきていると感じます。

最後に

“住まい”や“まち”を流れる風を考え、その質を高める取り組みを行うことは、身近な自然を大切に、景観を高めることに、そのままつながっていきます。



風の道となる道路沿いのせせらぎ
水辺は都市の風の質を保ってくれます



クールスポットとして、豊かな木々と
水辺のある公園の価値は高い



市街地内の農地をクールスポットとして活用を考えると